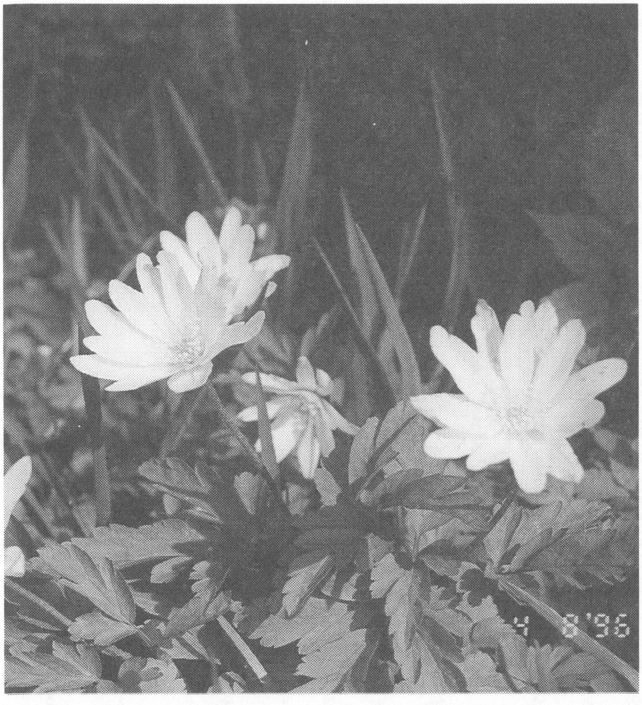


妙の光（たえのひかり）

通刊58号 **復刊37号**
2002年4月8日（季刊）
角田山妙光寺 発行
新潟県西蒲原郡巻町
角田浜〒953-0011
TEL 0256-77-2025

キクザキイチゲ

角田山は山野草の宝庫として知られている。雪割草やカタクリの他、水芭蕉、ヒトリシヅカ、エビネ等々、春の花だけでも実に九二種類が先頃出版された『角田山系花の手帳』で紹介されている。

妙光寺の裏山や墓地に一歩踏み込むだけでも、この季節には何種類か堪能することができる。このキクザキイチゲは山野草の代表格と言われ、本堂のすぐ南側、サンダルでも入れる草やぶに群生している。春の日差しに咲く可憐な姿には、心がなごむ。

同じキンポウゲ科のイチリンソウやニリンソウと間違えやすいが、こちらは花弁が十枚前後と、多いのが特徴とか。ただキクザキイチリンソウとも呼ばれるそうだから混乱してしまう。手軽に読める『角田山系花の手帳』は、身近な自然が愛しくなる、そんないい本です。

寺は人生の交差点？

小川　英爾

「安穏廟を申し込んでからずっとご無沙汰していました。気にしてはいたんですが、とにかく生活が大変で食べるのに精一杯でした。この間お寺からいただく『妙の光』は心の支えでした。御住職のは難しくてよくわかりませんが、奥様のところがいつも心に響いて、本当に救われていたんです。先日叔母が亡くなりました。新潟生まれの独身を通した人で、人に迷惑を掛けたくないと言って、私たちの援助を断り、一人で逝きました。でも決して悲惨ではなく、見習いたいほどの生き方でした。私たちもようやく少し落ち着いてきたので、この叔母の納骨と、せめてこれからできるだけの供養をしたいと思います。四十九日を迎える来月伺います。」という電話を、関東在住の安穏会員からいただいた。

こうした心に響く話に接することが、寺にいるありがたさだとつくづく思う。むろん、困っているけどどうしたら、なんて話しもそれなりに多い。寺は人生の交差点、なんて言うと大袈裟だが、たくさんの人との長いおつき合いのなかで、学ばせていただくことの大切さを実感する毎日だ。

それにしても、妻の文章のファンのなんと多いこと。この秋には宗派も違う真言宗から、お寺の奥さん方の関東地区研修会で講演まで頼まれた。今は堅い話より、心が癒される話が求められる時代なんだと、ひとり反省している。そんななかで、住職の最近の日常を少し書き綴ってみたい。

今年に入って一時は毎週講演をこなしていた。西川町高齢者学級の創立三十周年記念大会では、三百人近い人たちの前で話した。檀信徒始め外部の人も「角田のご前様の話が聞きたくて」と集まったそうで、席に座りきれないくらいだった。でも自分としては満足のいく話ができず、終わってから随分落ち込んでしまった。地元で喋るのはここがつらいところだ。ところが以外にも「とてもよかった」と、あちこちから評判が聞こえてきている。単にお世辞でもないらしい。でもいまだにどうしてよかったのかよくわからなくて、これまた悩んでしまっている。

講演と言えば角田山の自然を楽しむあるグループの総会に、檀徒の方の紹介でダライラマの話を、と依頼があった。昨年の角田山の歴史話が好評だったから今年もぜひとのこと。ダライラマとのご縁や師の言葉を今の日本社会になぞらえて話したのだが、なんと最後に最前列の方から「あんたがダライラマに見えてきた」と感想をいただき、思わず口に含んだお茶を吹き出すところだった。素朴でこんな暖か味のある言葉を掛けられる関係を素直に喜んでいる。

彼岸中のある日、檀徒のかあちゃんが訪ねてきた。「息子がずっと具合悪いんだけど、あの子を可愛がってた婆ちゃんが取り憑いているせいだって、人に言われた。私いつも一生懸命お参りしているし、ずっと家族のために頑張ってきた。そんな、霊が憑いてるなんてことないよね」真剣なおもちで聞いてくる。「もちろんだ。そんなことは絶対にない。俺が保証する。それより、早くいい医者に診せないと」と私。「それが実は・・・」と話が続くのだが、なかなか他にも大変な事情を抱えていて、一筋縄では解決しそうにない。それでも、大きな声で「本当に人生ってなんなんだろうね」と言いながら帰られ

たことに、こちらが救われた思いだった。「そうなんだよ、大なり小なりみんな苦労をしょって生きてるよね。負けないでね」声には出せないが、後ろ姿に語りかけるのがやっとだった。

〝先祖の祟りを払うために〟など言って、高価な印鑑や壺を売りつけ、信者に誘い込む宗教が跡を絶たない。それを霊感商法と呼ぶが、新潟市であったその対策会議に、北海道や九州から出席したというジャーナリストや弁護士が妙光寺に足を運んでくれ、なぜ洗脳されるような宗教に若者が走るか、話を聞かせていただいた。伝統仏教の怠慢だと言われる。でも妙光寺は頑張ってるとも言っていただいた。

冬から春にかけこれからの妙光寺について、ずっと考えてきた。建て物は立派にしていただいたが、全般に寺に来る人の世代が若返らない。法事だ、命日だといってお宅に招かれることも昔に比べて少なくなった。一般に宗教があまり日常的でなくなってしまっているかに見える。理由はいろいろあろうが、この先寺は要らないものになってしまうのだろうか。

幸い妙光寺は、まだ皆さんの信頼の気持ちがしっかり伝わってくる。ただ政治のドタバタや経済の混乱等々に見るように、今この国自体が大きな変わり目にある。これは他人ごとではなく、私たちひとりひとりの問題であり、これと無関係に寺もあるわけではない。大きな流れに心を配りながら、皆さんとの関係、社会との関係を大切にしていく寺でありたいと思っている。

信心

苦労の支え

松山 故 河村キクさん（八十七歳）

昨年暮れの二十八日、河村キクさんは八十七年の生涯を静かに終えた。しかしその人生は、この時代に生きた人それぞれがそうであったように、苦労の中にあった。ただキクさんには熱心な信仰が光っている。

幼くして、子どものいない叔父夫婦の養女になった。二十歳で迎えた婿、清さんとの間に双子の娘が授かった。しかし清さんは、若い頃の無理がもとで重い肺の病気を患っていた。結婚後もずっと家業の農業に従事することなく、亡くなるまでの十三年間、寝たり起きたりの生活だった。ただ芸術の才能があって、誰に習ったわけではないが、絵、彫刻、竹細工に夢中だった。今も残るいくつかの作品の中でも、お経文で描いた観音様は絶品で、キクさんは立派に表具して、桐箱の中に大切に保管してきた。

清さんの描いた観音様

しかし女手ひとつで、病気の夫とその後の二人の娘を養うのは大変だった。畑と田んぼの仕事はもとより、舟で潟の底の泥をすくい上げて肥料にする、男でも重労働のごみ上げという作業もやった。採れた野菜をリヤカーに積んで、片道三里はある吉田の町まで売り歩いた。晩年は娘が途中まで車で運んだが、野菜売りは八十才まで続き、こうして貯えた金で、すこしずつ土地を買った。「だから今我々がこうして暮らせるんだよね」とは、同居して在宅のまま看取った娘夫婦の言葉だ。

キクさんを支えたのが、幼いころから家事を担ったこの双子の娘と、実家の兄、そして強い信仰心だった。近くで農家の兄は、常に親身になってキクさん親娘を助け、兄亡きあともキクさんは実家によく足を運んだ。

さらに毎月欠かさず通ったのが、妙光寺と岩屋の七面様。六キロの道をいつも歩いて。寝たきりで動けなくなってからも娘に「お寺に行ったら七面様に参ってきて」と、忘れることはなかった。「何を祈ってたのか、若い頃は寒いなか風呂場で水行もしていた」と娘の夫。本山の身延山参りも十二、三回は行ったという。

「昔は皆大変な時代だった。それでもあの気丈な性格だから、やってこれたんだね」娘夫婦の言葉だ。

寺の動き

報告とお知らせ

本堂工事会計報告

中間報告ですが、工事委員会ならびに総代世話人会議で承認されました。

まだ銀行借入金もあり、支払い、入金ともに完了していません。月掛けの方の大半は三月で終わりましたが、開始が遅く残金のある方、都合で納金が遅れている方には、引き続きお願いします。

この不況のさ中に、目標額の二億五千万円超の寄付申込をいただき、なんとか目途がつきましたことを大変喜んでおります。ありがとうございました。詳細は別紙報告書をご覧下さい。最終決算ができましたら改めてご報告します。

新体制

法律が変わって、宗教法人の運営の透明性がより強く求められています。予算規模の大きいところは、県に会計報告書の提出義務があります。妙光寺は財産目録の提出でいいのですが、それとて収支決算が明確でなければできません。

また安穏廟事業の基金運用益が十三年度で八百万円を越しました。今後この収入を含めた妙光寺の全会計を、総代世話人会議で審議して、県及び全檀信徒に報告することにしました。これまでは護持会の会計報告だけしていたことに変わるものです。

そこでこれまでの護持会を解散し、皆さんには新たに〝檀信徒会〟として、妙光寺の運営に積極的に関与していただきます。年会費は今まで通り一万円が基本です。

その他に、曖昧なままできた総代世話人の規定を明確にしました。法事、葬儀等で本堂と客殿の利用が増えていますが、より気軽に利用しやすいよう使用規定を作りました。〝檀家〟という呼び方を寺院規則に従い〝檀信徒〟に統一することにしました。

一つ変更すると他にも関連してきます。一方でそれを一度に全部変えると混乱を生みますので、徐々に相談し改めてお知らせしていきます。

安穏廟事業報告

安穏廟の四基が昨年秋で満杯になり、受付を停止しました。基金総額は一億八千万円となり、十三年度の運用益が八百万円余りです。

ところが檀信徒や会員の紹介による申込希望が跡を絶たず、協議の結果増設を決定しました。隣接する敷地四百坪余りに樹木を植え、その内部に八区画づつの小さな形で七月中に完成です。新たに『杜の安穏』と名付けました。

当初二千万円の工事経費が見込まれますが、うち一千万円を安穏会員で東京の小黒トメさんが寄付されました。

この計画で、将来の一般墓地の敷地が不足します。その分は従来の山側の墓地の区画整理を行うことで、敷地の確保と管理経費の軽減を予定しています。

その他の計画

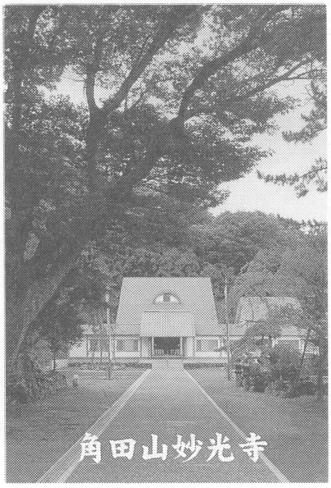
一人でも多くの方が寺に足を運んでもらえるよう、今後検討していきます。

お経のテープ希望者が予想外に多かったので、妙光寺で毎月どなたでも参加できるお経と法話の会を企画しています。また「何かお手伝いでも」という声がありますので、作業の応援をしていただく方も募集します。

身延団体参拝を九月二十九日から三泊四日、四十名で計画中です。後日詳細案内します。どなたでも誘い合わせて参加ください。

角田山妙光寺ビデオ制作委員会（2002年）

本堂・祖師堂落成記念　角田山妙光寺



ビデオのパッケージ

本堂工事記録ビデオ完成

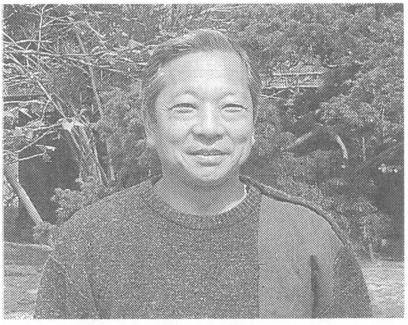
本堂工事を記録したビデオがようやく完成しました。プロのアナウンサー始め、放送業務に携わる方たちが製作協力した本格的な仕上がりです。三十分。本体二千五百円。送料五百円。予約申込者にはお渡し済みですが、新規の希望者はご連絡ください。（写真はビデオテープのパッケージです）

四菩薩像製作の遅れ

新本堂のご本尊として、現在お釈迦様像が一体お祀りしてありますが、脇侍として四体の菩薩像をお迎えする予定です。その製作が佛師の都合で遅れていて、来年春に最初の二体が納まることになりそうです。

新人事

広く整備された境内と墓地の管理を、これまで業者に委託してきましたが、除草剤を多用するので、木が枯れたり、土手が崩れたりの問題がありました。そこで安穏廟の増設に合わせ、専従者を一人置くことにしました。



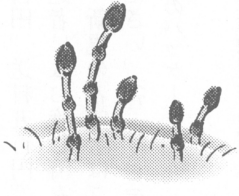
小泉照夫さん

小泉照夫さん五十五才。以前から調理の手伝いにはお願いしてきたプロの板前さんで、さる大手葬儀社を退職したあと、趣味がこうじて職業訓練校で庭師の資格を得たという、妙光寺にはうってつけのひとです。気軽に声を掛けて下さい。

裏口整備

勝手に通じる裏口には松の木が二十本程ありましたが、松くい虫で大半が枯れてしまい危険な状態でした。これを前述の小泉さんと、巻町の本多さんが奉仕で、木を倒し整地しました。一角に倉庫代わりのコンテナを置き、他は松以外の木を植えていく方針です。

整備中の裏口



増設工事他

『杜の安穏』着工

安穏廟が昨秋に満杯で受付停止していましたが、檀信徒、会員からの紹介による申込希望が後を絶たず、増設してお受けすることにしました。

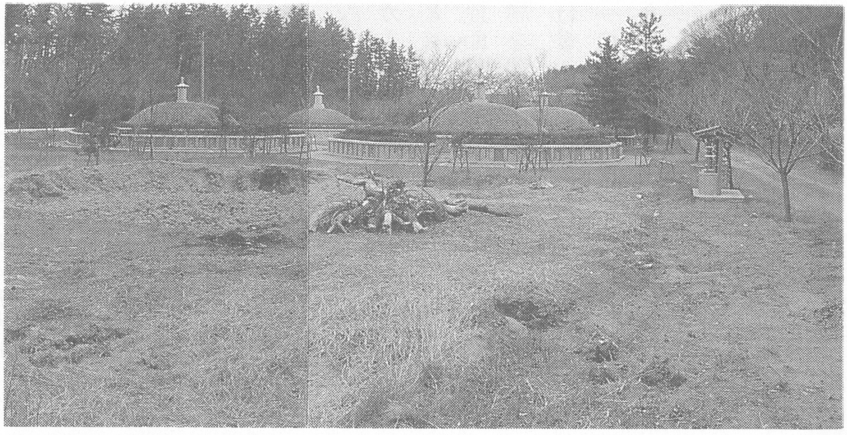
ただし全体のバランスを考慮して、趣旨は同じですが、形を変えました。安穏廟に隣接する敷地に約四十本の木（アキニレを予定）を植え、その下に八区画単位の小さな集合墓を散在させます。廟と呼ぶにはあまりに可愛らしい大きさですので、『杜の安穏』としました。杜とは魂の宿る森を意味します。基本設計は安穏廟と同じ、野澤清先生です。

森の中は自由に散策できますし、安穏廟との中間に東屋（あずまや）を建て、休憩施設とします。同時に安穏廟を含めた全体の苑路を整備します。工事費の一部にしてくださいと、会員の小黒トメさんが一千万円を寄付してくださいました。引続き整備を進めていきます。

すでに三十人近い方が待機しておられ、優先的に受付しますが、最終的に全体で二百区画余りの受付が可能かと思われます。正式なパンフレットは五月になります。

法要、葬儀のご利用に際して

別紙お知らせのように、皆さんに気軽に使っていただけるよう、本堂と客殿の利用規定を作りました。またこれまで近くに花屋もなく不便でしたが、法要の



「杜の安穏」予定地

際のお花等は、一括して用意できます。ただお墓参りのためだけのお花は配達できませんので、各自でお願いします。

妙光寺では葬儀は檀信徒に限りお受けしていますが、本堂の使用も同じです。これまで「葬儀を頼みたいから自分たちは檀家になってもいいが、息子の代までそれを受け継がせることは約束できない」と言う声を多くいただきました。このたび呼び方を檀信徒に統一しましたので、これまでの檀家と違い、個人が単位ですから、次の代がいても強制することはありません。

また、生前から葬儀の申込みを希望される方が何件かあります。その必要経費を知りたいとも。

そこで、いかに低価格で準備できるか、数件の葬儀社と折衝を始めました。お互いの負担を軽減しながら、過剰な装飾のない葬儀ができたらいいと、考えています。

ボランテラ募集

「なにかお手伝いがあったら声を掛けてください」と、何人かの男性から言われています。主に境内での清掃作業ですが、一緒に汗をかいてくださる方を募集します。寺ですからボランティアならぬボランテラ（松本神宮寺の高橋住職の造語です）。

とりあえず人数確認のため登録制にして、作業日は電話連絡します。男女問わず、いつでもお申し出ください。

当日の昼食は各自持参ください。味噌汁と缶ビール程度を用意します。

歌集『秋楡（アキニレ）』から

会員の山本千代江さんから、安穏廟に触れた短歌が掲載された歌集をいただきました。その一部をご了解のうえで紹介します。

（「安穏廟」のことなど）

私は満州の部隊で終戦を迎えた。ソ連軍は、昭和二十年八月九日に侵攻を開始し、各地で国境を突破。十九日には一部が奉天に侵入した。各地で略奪暴行、破壊が起きた。そして九月末までに、十万世帯の避難民がソ連軍を逃れて、奉天へなだれ込んだ。

私は地下の穴に身を潜めていた。ソ連兵の軍靴の音が遠のいた折り、カーテンの隙間から外を見た。すると着衣のない枯木のような青年が、洗面袋を前に当てて崩れた煉瓦塀に顔を埋めるようにもたれていた。私は夢中だった。ありあわせの布で、一度も縫った事のないパンツを縫い、身をかがませ、当たりを見廻しながら、青年に届けに行った。

しかし、青年は既に息絶えていた。コップ一杯の水も飲ませて上げられず、県名、氏名も聞けないで、青

年を死なせてしまったこと。なんと不覚だったことか。思い出しては激しく悔いる日々が、今も猶つづいている。

私はこのごろ「安穏廟」というお墓を求めた。塚の周囲に百八の個人墓を配した集合墓である。私は安穏秒の、海に向く側にある「妙の二号」を決めた。

その地で、玄界灘の彼方満州に於いて故里の土を踏むことなく息の絶えた青年の御魂を、呼び弔うことにしたのである。

御し難き現身なれど救い得ず
　裡にひとりの餓死者を抱く

ひたすらに祈りし平和くずれゆく
　われらがくぐりし戦火ふたたび

海に向く安穏廟を決めたれば
　魂よ還れ玄海越えて

フェスティバル安穏

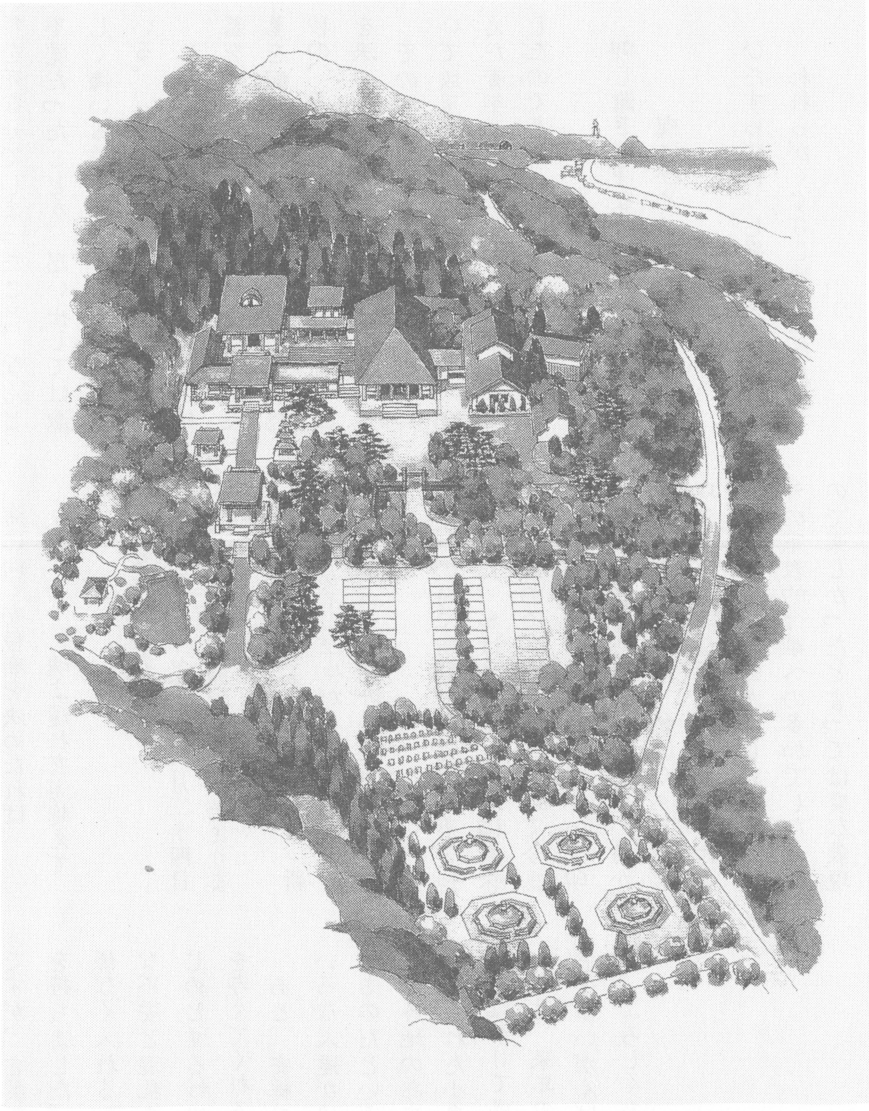
第十三会になる今年は八月二十四日です。企画会議も開いて準備が始まりました。

昨年お手伝いスタッフの一人で、新潟市内の女子中学生が、昨秋にお手紙をくれましたのでご紹介します。

中一の時に新聞で安穏廟の事を知りました。私はもともとお寺に興味があったので、安穏廟について今までとは違う新しい感じの墓という印象を受けました。岩屋も小さい時から行っていました。私は今まで葬式以外で宗教的な行事には全く参加した事が無く、今回がはじめて葬式以外の宗教的行事への参加でした。なので楽しかったと言っては変な表現ですが、言葉では表せない様な印象を持ちました。安穏廟は、宗派に関係なく入れるということで、今こんな不安と混乱の社会で、安穏廟をはじめとする妙光寺の院庭はやすらぎを与えてくれる場であると思います。

あと、安穏フェスティバルはいろいろな人達が協力して作りあげていくものだということに気が付きました。各地のお寺の住職の方や私に新聞をくれた小泉さん、皆様とても良い人ばかりで感激しました。

では、来年の安穏は二回目ですし、お手伝いがんばりたいと思いますので、よろしくお願いします。



お寺の案内パンフレットを縁起（えんぎ）といいます。本堂が新しくなってその作り替えを進めていますが、先頃そこに使う案内絵図を、近くに住む画家に描いてもらいました。原画はカラーで、縁起もカラー写真を多く使ったわかりやすいものです。六月完成予定。

寺庭から

お寺の進む道は・・・・

小川　なぎさ

この冬はテレビから目が離せなかった。政治の世界をめぐって様々な出来事である。そして過日新聞に大きく出ていた身延の七面山元別当の不祥事で、身が縮まる思いがしている。

どんなところにも悪い人はいて、悪とする事柄はある。でも最近はそれが当たり前のようになって、この国の将来はどうなってしまうのか?と悲観的に思うことが多い。大人が大人だけの社会で生きているのならかまわない。でも私たちは多くの子供たちに命をつないでしまった責任をかかえている。この先その責任をどんな形で果たして行けばよいのか悩みは大きい。

とかく目先の生活のことを最優先に、お金で豊かさを実感しようとしてきた大人の生き様は、清廉潔白や正義感などの言葉を隅っこに追いやってしまったかのように思える。

ただそんな風に政治や社会の質の悪さを嘆くばかりではなにも始まらない。だってこんな世の中になってしまったことは、私たち一人一人の責任なのだから。

善悪の判断や、行動の指針になるようなテキストを持っているわけでもないし、なんとなくおおざっぱに自分にすりこまれている価値観を持った生き方を心から反省しなくてはならないと思う。

だからどうしてもこれからのお寺の役割についても真剣に考えざるを得ない。お寺は政治や経済界のように特定の人との利害関係は全くない。かわりに力もない。でも心ある人たちとともに、仏様の教えという基盤にそって、人間の本質にせまる生き方を考えて、実践することは出来るような気がする。

世のお坊さん方には、もっともっとしっかりして欲しいと願うばかりだ。妙光寺の住職も同じ。様々な期待に応えることは大変なことだけど、僧侶としての独自性を保ちながら、宗教者としていかに社会に関わっていくのか責任は重い。

新本堂にともない、いろいろな体制も新しくなりつつある妙光寺が、はたして本当に人々に必要とされるお寺になれるのか、これからが正念場。皆さんとともにさらに中身を磨いていかなければいけないと思うのですが。

行事案内

ご判様お開帳大会（だいえ）

日蓮聖人ゆかりのご判をお開帳する、三百年前から続く伝統行事です。お斎もあり、どなたでも自由にお参りできますので、お出かけください。

四月二十九日（みどりの日）

午前八時半　受付開始
九時　説教
十時半　山門法要　お練り（稚児・音楽出仕）
十時四十分　音楽大法要
十一時四十分　水行　法楽加持
午後十二時半　説教　お開帳
一時半　施餓鬼法要

- 事前に志納金と施餓鬼供養塔婆、祈願の申込袋を配布します。祈願は午前の大法要で、施餓鬼塔婆は午後の施餓鬼法要で、読み上げします。お申込みください。
- 今年の年番は巻・割前地区です。また角田地区には幟立てと輿担ぎ、それぞれにお願いします。
- 出仕の稚児を募集しています。三歳くらいから小学一年生くらいまで男女計十名。白足袋と費用五千円（写真、記念品、昼食代）。昼食後解散です。

とき・あが

高校生になった娘たちと、本当に久しぶりに映画を見ました。話題の「ロードオブザリング」。三時間もあると聞いて、きっと寝てしまうと思ってました。それがうるさいくらいに音が大きくて、とても寝るどころではありません。

いつも「忙しいところを・・・」と皆さんに心配していただきますが、最近かなり暇なんです。不景気のせいか法事も少なく、時間にゆとりが出てきました。人手が増えたせいもあるでしょう。

どうぞ気軽に、遠慮なく声をかけてください。あまり煙たがられるのも寂しいんです。忙しいとか、暇だとか、勝手ばかりですみません。

小川